



# 卓 話



## 「私のバイオグラフィ」

ジャズ歌手 マリーンさん

私、マリーンはフィリピン生まれです。母方はスペイン系とフィリピンの系の家庭で、父方は祖父が北京の中国人、祖母は中国とフィリピン人の混血です。そうした父と母が結婚して私が生まれました。フィリピン語、英語、そして日本語も達者とは言えませんが何とか使うことができます。残念なことにスペイン語、中国語が使えません。私の学生時代、スペイン語は中学校で必修でした。しかし、わたしは英語ならともかく、どうしてスペイン語を勉強しなくてはならないのか納得がいらず、勉強しませんでした。今はとても後悔しています。



私が小さい頃、父母の話によるとお客さんが来た時など、よく机の上などに乗り歌っていたそうです。我が家は父母は共働きで、あまり金銭的に余裕がありませんでした。私を含め6人兄弟なのですが、学校が始まりますと、多い時は5人いっぺんに学校に通わなくてはならなくて、それは大変なことでした。日本では年長の長男などが大切にされますが、フィリピンでは年長の子供は下の子どもの世話をする役で、いつも色々なことが後回しです。小学校の頃を思い出すと涙ぐむこともあります。長い休みが終わると、普通子供は学校に行くのを楽しみにするものですが、私はいつも気が重くなっていました。少なくとも4、5人でパッドペーパー、鉛筆、ノート、本、色々な学用品を買わねばなりません。普通、パッドペーパーは一人一人の子供が持つものですが、私の家はパッドペーパーを分けて利用してはなりません。その為にすぐになくなってしまいますので、先生に一枚出すように言われて困った時は、友人が一枚分けてくれるなどして都合をつけてくれました。

その時に、ありがとうという気持ちを自然に学んだのです。親から教えてもらうよりも、クラスメートから教えてもらったと言っても言い過ぎではないでしょう。また、私が困った時、大きな壁にぶつかった時、誰かが手をのばして私を助けてくれるという、あの頃経験したことが私の今の人生そのものだと思っています。こうした厳しい家庭の状態でしたが、心のどこかで私は大学へ行きたいと思って

いました。大学を出て良い職につき、弟、妹をちゃんとした学校に通わせたいと思っていたのです。

どういうわけか歌は2才の時から好きだったので、物心ついた時から歌っていました。フィリピン人は歌が大好きなので、お祭りの時はちびっこ歌コンテストのようなものがよく催されます。コンテストがあるとダンプロックがやってきて、荷台の両サイドを押し倒したものがステージとなります。そこでギターを弾いているお兄さんの伴奏で、子供達が出演し歌を歌います。7才位の頃から私はそういうコンテストに出ていました。子供達が歌うのを見て、これなら入賞出来そうだと思いますと、親に内緒でエントリーし、毎回何かの商品を貰うことができました。賞品はお砂糖やお米等の生活必需品だったので、それを持って帰ると大変母に喜ばれました。それがうれしく、地元どころか今度は家から離れた所に出向いてコンテストに出場するようになりました。私を見た人が母に報告してたようですが、母も怒ることはありませんでした。

中学に入り、あと何年かで大学進学を進路を決めなくてはならないという時、自分の父母が一生懸命働いているのを見て、このままでは大学進学は無理なことに気が付き、そこで歌手になろうと思ったのです。それはスターやアイドルになるというよりも、大学進学のお金を貯める為でした。そうすれば、弟や妹も大学へ進むことが出来たと思ったのです。

フィリピンは18歳でないと夜のライブハウス等では働けないのですが、私は化粧をして14才で18才と偽ってお店で働き始めました。雇ってくれた店も多かったのですが18歳以上を証明する住民票を要求するお店もあり、何も知らずに住民票を提出したところ、大変驚かれたこともありました。それでも14、15才の頃からピアガーデンでお金を稼ぎ始め、16才から3つ星クラスのホテル、次には5つ星のホテルとそれこそトントン拍子で出世しました。その時はまだ高校生で、毎晩稼いだお金を全て母に渡していましたが、チップは自分のお小遣いとして貰ってましたので、お金には困りませんでした。

15才位の時、日本のプロモーターに出会いスカウトされたのですが、その頃は既にフィリピンで歌を歌うことを楽しみ、学校に普通に通え、テレビ、ラジオにも出演してたこともあって、日本に稼ぎに行きたいとは思いませんでした。お断りしたのですが、あまりにも何度も足を運ぶので、私は大学に行ってから日本に行きましようかと答えてしまったのです。すると大学一年の一学期が終わった休みの時、大学に入ったのだから日本にと再び誘われ、言い訳に困った私は無理な条件を提示しました。

まず、ナイトクラブで7回も8回もステージはしたくない（それがフィリピン歌手の普通でした）、多くとも2回にして欲しい。そしてアパートも他の人達と共同ではなく、母と一緒に住みたい。しかもギャラは普通の3倍を、ということをお願いしたのです。この条件は絶対に呑んでもらえないと思っていました。しかしその人はなんと承諾してしまい、行かざるを得ない状況になってきたのです。丁度その頃、フィリピンプラザのホテルでたまたま手相を見てもらうことができました。そこで貴女の成功は自分の国ではないと言われたのです。しかも、もうすぐこのフィリピンから出るだろうという占いでした。それが10月の話で、12月にはもう来日していましたので、今考えるとその占いは当たっていたのかもしれない。

日本に来て初めての仕事は赤坂のミカドでした。ミカドのクリスマスショーは大変豪華で、ホステスだけでも100名を超えます。その時のビックバンドの中にフィリピンの有名なピアニスト、ペペメルトも出演し、早稲田大学のバックコーラスで私が歌うという2週間のショーでした。その次に同じグループで札幌ミカドに出演と、来日当初から色々な仕事をさせてもらいました。

しかし私をスカウトしてくれた人は、クラブのショーに出演させるのではなく、デビューさせたいと考えていたのです。彼は昔、自分が歌手であったので、私に彼の夢を託したのかもしれない。彼は私のデモテープを作り色々な場に出し、結果として東芝EMIでアイドル歌手としてデビューが決まりました。

しかし実際になってみると、アイドル歌手というものは大変な仕事であるということに気がついたのです。まずにこにこして「おはようございます」、「宜しくお願いします」という挨拶さえすれば良いということをお願いしました。でも私は歌手として日本に来たという気持ちが強く、「かわいこちゃんぶる」のは納得がいかなかったのです。アイドル時代で一番ひどい経験は、自分がグラビアに出た時でした。プレイボーイ、週刊現代等にあるようなグラビアを想像して頂ければおわかりかと思えます。当時マリリンと名乗っていましたが、片ページは私、一方のページはアグネス・ラムでした。フィリピンでは水着になるのは恥ずかしいという習慣があったので、それまで私は着たことがなく、海でもプールでもショートパンツやTシャツで泳いでいました。そんな私がグラビアで初めて水着を着て、しかもそれがツーピースだったのです。このツーピースは写真の撮り方によって大変きわどいものになってしまいます。それが記事になった時、母に知られたらどうしようかと思いました。

案の上、その日帰宅すると母から平手打ちをされました。こんなことをさせる為に日本に来たのではない、連れて帰ると怒られたのです。その時は大変でした。私も気の進まない仕事をしていたので、その時フィリピンに帰ろうかと思いましたが、その時頭のどこかで声が聞こえたのです。もう少し頑張りなさい。もう少し頑張ればいいことが絶対あると聞きました。自分でも姉として、今のままでは弟たちに持ち帰る土産話もない。お姉さんは日本で何をし

てきたのかと聞かれても答えられない。そこでもう少し日本で頑張ろうと決心しました。

アイドル歌手の時、ある有名な記者に貴女は売れないと言われたことがあります。私はどうしてなのかと理由を聞きました。「貴女は歌が上手すぎるので日本では売れない」というのがその答えでしたが、その時は意味が分かりませんでした。しかしその言葉が自分の中にずっと残っていて、そんなことが理由なら絶対に自分は売れるということを見せてやりたいと心のどこかで思い、自分を信じるようにしました。

すると不思議なことに、自分がこれをやろうと思うとimpossibleということがなくなり、どんどんpossibleになっていきます。もちろんそれは自分だけの力ではありません。みんなの力がどんどんと目の前に集まり、道を開いていくという感じでした。

丁度その時、人生の分岐点となる「なんとなくクリスタル」という映画にジャズシンガーとして出演することになり、それによりCBSソニーからのデビューの話が持ち上がりました。私はTスクエアバンドの歌手と思われていたようですが、プロデューサーの人はソロの歌手としてデビューさせようと考え、それが今に続いています。

1981年のデビュー以来、26、7枚のアルバムを作ることになりました。でもこれは何枚CDがあるか、何してきたかではなく、アイドルであった頃から、周りの人達に恵まれ、愛されて、しかも何かの形でサポートしてくれ、さらに自分もまた何らかの形で役に立っていることが、歌手になって一番幸せなことだと思っています。

「元気をもらいました」「暗かった気持ちが明るくなりました」といわれると歌手になって本当に良かったと感じます。

今、夢は何かと問われると困りますが、いくつになっても夢を見ていきたいと思えます。私には4才と2才の子供がいます。この子供達は私が生んだ子ではなく、神様から貰った子供です。この子供達の為にも頑張って、歌手のマリーンを分かって欲しいと思えます。子供を持つということとは色々な勉強をさせられます。

子供達は幼稚園なのですが、そこで私も社会勉強から漢字の勉強まで新しいことを学んでいます。今迄漢字が読めなかったのですが、幼稚園の連絡帳を書くとなると、毎回マネージャーに頼む訳にもいけないので、4月から勉強し、パソコンでしたら漢字変換を使って打てるようになりました。

私はこのように日本に来てかなり恵まれた道を歩んできました。正直なところ、自分はフィリピン人というよりも日本人であると思っています。ただ日本語は大変難しく、パーフェクトに話をするには出来ませんが、これからもマリーンを応援してもらい、小さい夢でも大きい夢でも常に夢を見て目標を持ち続けていきたいと思えます。

安田さん、本日のようなチャンスを与えてくれて本当にありがとうございます。又、皆さんともまたどこかで、歌う場所だけでなくもお会いしたいと思います。